民俗信仰としての大般若經

五來重

日本佛教の特質とその構造をあきらかにするためには、まず佛教經典がわが國でいかに受容されたかという問題を解決せねばならないが、これに大きな示唆をあたえるものは多くの經典の民俗信仰化である。とくに大般若經六百卷は印度では大乘佛教の根本思想たる空觀をといた哲學的經典として重視されたのにたいして、わが國ではその教理的な論理性はまつたく無視されて完全に民俗信仰化した。この事實は日本佛教の成立過程における固有信仰との關係およびその前論理的信仰性または古代宗教的呪術性をもつともよくしめすものといえよう。

さて文獻によれば大般若經をわが國で最初に普及させたのは日本三論學の巨匠、大安寺の道慈律師であるが、彼は天平九年四月八日に奏上して諸國に大般若經轉讀を恒例の年中行事とせんことを請うてゆるされた。續日本紀にのせられた奏上文および三寶繪詞の大安寺大般若會の緣起によつてそのときの事情をみると、大安寺がはじめ高市の地に創建されたとき雷神をまつつた子部社の木をきつたためしばしば雷火に遭つた。そこで道慈は大安寺が平城京に移建されたとき落雷をさける目的で淨行僧による大般若會をおこしたところ、その災が銷えたのでこの奏上となつたのである。これは大般若經が最初から民俗信仰の對象であつたことをしめすものでなければならない。

また六國史以下類聚國史、日本逸史、扶桑畧記から吾妻鏡にいたる上代、中世の史書および寫經願文などによつて大般若經轉讀または寫經の目的と動機を分類してみるとつぎのごとくになる。——①災異を消除せんがため、②疫疾厲鬼をはらわんがため、③物怪のおそれをのぞかんがため、④怨靈の怨恨をしづめんがため、⑤宮殿または居宅を安鎭せんがため、⑥降雨をいのり風災をふせがんがため、⑦死者の靈魂の成佛得脫または往生をいのらんがため、⑧法味法樂によつて神意をなぐさめんがため、⑨自己または家族の現當二世の安樂に資せんがため、⑩五穀豐穰祈願のため、⑪年中行事として諸願成就のため、等である。

このなかで第一項より第七項までは大般若經の民俗信仰に由來するものであり、この經典信仰がいかに常民の靈魂觀念と固有の呪術宗教にかたくむすんだものであるかを知ることができるのである。

まず災異とか疫厲、物怪（もののけ）怨靈、死靈などはすべて常民の宗教觀念の根本をなす古代的な靈魂觀念または靈鬼觀念 Daemonism の具體的表象であり、旱魃、風害、虫害にもとづく凶作、およびあたらしい住居への恐怖もすべて怨靈的な、目にみえぬ靈魂の作用とかんがえられ、これを「追拂い」または「なだめ和げる」た

めに種々の古代呪術がおこなわれたのである。

大般若經がこのような固有の古代的宗教觀念に根ざした古代呪術の目的にもちいられ、この哲學的內容をもつた經典に强力な呪的威力が期待されたということは、日本佛教の根本的性格につよい民俗性の潛在することをしめす一證左とすることができよう。

しかもわれわれが興味ふかく感ずることは上にあげた文獻にあらわれる大般若經の民俗的信仰が當時の有識階級たる貴族と僧侶に指導された國家的行事に多くみられることであつて、これをたんなる無智な庶民の迷信俗信として無視するわけにはゆかないのである。それゆえわれわれは現に各地に殘存している民俗的大般若經信仰とその行事に關する多くの多くの採集例を、庶民の無智からでた迷信とはかんがえないで、古代から中世をへて現代につながる日本佛教の經典受容の本質的なあり方の一類型をしめすものとかんがえたい。そこでこの種の採集例の二三の地方における概略をあげて大般若經の民俗信仰の一班を紹介し、その根底にひそむ宗教觀念がいかなるものであるかをあきらかにしたいとおもう。

㈠　關東北部の天臺、眞言、曹洞などの寺院には村祈禱、辻祈禱または「おでぱんにや」とよばれる大般若轉讀行事がのこつているが、これは文獻にみえる「境の邑に疫神を防察する」とか「七條朱雀大路の衢に大般若經を轉ずる」などとあるごとく、村境または村のなかの辻に祭壇をつくつておこなわれるもので一種の鎭魂呪術であることはうたがいない。時期は正月か夏のはじめで祭壇は笹竹四本を路上に立て注連をはり棚をつくり、あたかもこの地方の盆棚、魂棚のごときものである。般若さんの風にあたれば一年中病氣をしないとか夏負けしないということは全國一般とおなじで、村の若衆が百卷入りの大般若經箱をかついで村內をまわり、家々の入口で一二卷を轉讀して「般若の風を入れる」のである。病人のある家ではとくに寺に錢若干をおさめて一二卷を借り、これで患部をなでたりたたいたりして一年間神棚へあげておく。またこのとき寺から出す大般若經轉讀祈攸のお札は辻札または關札といつて笹竹にはさんで村の四方の入口に立て、一般の家でもこれを戶口にはるのを常とする。

㈡　北陸地方では眞言宗と禪宗の寺院で正月と春から夏にかけてよくおこなわれるが、とくに正月の行事は數ヶ寺連合で盛大におこなわれることが多く、檀家の家祈禱には別に仁王般若經や金剛若經などのポータブルな般若經典をもつてゆく。能登には大般若經を借りて患部にのせる信仰があるばかりでなく、五十回忌法要には個人の家で六百卷の轉讀をしてもらう家がある。これは三十三回忌または五十回忌法要が俗に「まつりあげ」といわれ佛が神になる法要と信じられているので、この轉讀は神祇法樂または神前讀經のいみでおこなわれるものとおもう。

㈢　近畿地方の周邊山間部も大般若民俗信仰のつよくのこつている地帶であるが、こゝでは正月行事と雨乞行事と流行病の際におこなわれる。眞言、天臺の寺院ばかりでなく村々における小さなお堂や氏神社の前でもおこなわれ、このときは村人が當番で一年間潔齋して氏神に奉仕する一年神主が經卷をとりあつかい、かならずしも僧侶をまねかない。村人は全部お堂または社にあつまつて般若の風にあたりお札をいたゞくとともに、轉讀札は村の四方の境に立てられる。經卷を借りて家にまつる風習も稀に見出されるから、この借經の信仰は關東北部、北陸、近畿にわたる廣い分布をもつことが知

られる。

なお近畿地方の大般若行事の特色として轉讀のあいだに「亂聲」「ダダ押し」「鬼走り」などが村人によつておこなわれることは、中國地方山間部の「猪追いのオコナイ」といわれる大般若行事とともに興味ある事實といわねばならない。亂聲（らんじよう）は村人がお堂の床板や緣を牛玉杖でたゝきまわり、ダダ押しは堂內を跳ねまわり踏みまわつて騷音をたてるものである。鬼走りは鬼踊りともいい、鬼の面をかむつた鬼役が松明をふりながら堂內堂外を走りまわり踏みまわるのである。全國一般に大般若轉讀といえば大太鼓をいさましく打ちならし經本で經机をしきりにたゝくのを常とするが、これはまさしく亂聲、ダダ押しと同じものであろうし、大般若にはできるかぎりの大聲をだすこともこれと關係があるとおもわれる。謠曲「葵上」に「あらあらおそろしの般若聲や、これまでぞ、怨靈こののち、またも來るまじ」とある般若聲は怨靈を威嚇する大般若轉讀の大聲をさしたものに相違なく、鬼の面を般若面とよぶことは大般若にともなう鬼走りの面から轉じた名稱と解してよいであろう。

さてこのような亂聲、ダダ押し、鬼走りは大般若經の民俗信仰を解明する大きな鍵である。というのは騷音や鬼面が村落共同體に災をもたらす怨靈や悪靈を追拂うための威嚇手段であつて、松明の火とともにもつとも素樸な鎭魂呪術であつたとかんがえられるからである。大般若經がこのような古代呪術を强化するために受容されたことは、上にあげたわづかな例からもほゞ承認されるであろう。

ところで大般若經はなにゆえに悪靈攘却の鎭魂呪術に採用されねばならなかつたのであろうか。これはすでに天平十七年九月十九日の大般若一百部書寫が藥師悔過とともにおこなわれたことにも暗示せられているごとく、「悔過」すなわちわが固有信仰における祓（はらへ）の觀念を媒介として必然的に鎭魂呪術と結合したものとおもう。祓はのちの神道では精神化されて罪穢をもはらうこととなるが、起源的には外敵または實體化された悪しき靈魂を「追拂う」ための對抗呪術であつた。そのためにこそ「打つ」「叩く」「踏む」「叫ぶ」「火を焚く」「恐ろしい假面をつける」などの呪的行爲がともなうのである。南部諸大寺にのこる修正會修二會の悔過法要を見ればこのことは說明を要しないであろう。

しかるに一方大般若經は「空」をとく經典であることが知られると日本人は「空」を實體化して「空ずる力」として理解し、悪靈を空ずる呪力をこの經典に期待してたちまちに固有信仰の祓とむすびつけたものと推定される。すなわちわが國における大般若經受容の宗教的基盤はきわめて古代的な固有の靈魂觀念であつて、この觀念に對應する祓の呪術を媒介として大般若經が民俗信仰化したのである。このような經典の受容を指導した道慈律師以下の學僧たちがはたして方便のために空の民俗的理解をゆるしたかどうかは不明であるにしても、このような既成の宗教觀念と結合しなければ大般若經の普及は見られなかつたことだけは是認されてよいであろう。

要するにわが國人にとつて、大般若經の空の形而上學的意義やその論理的構造よりは、邪悪なるものを「空ずる力」に關心がもたれたという事實は、日本佛教の性格を規定する上に重要な問題であつて、ことの善悪はしばらくおき、わが國における佛教普及の過程における佛教の民俗信仰化の意義をみとめないわけにはゆかないとかんがえられる。